

【原 著】

大学生における卒業後の進路希望とキャリア観
—積極的・消極的な労働観に着目して—

飯田 都

Post-graduation career aspirations and career views among university students
– A focus on active and passive views of work

IIDA Miyako

2023

岡山大学教師教育開発センター紀要 第13号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.13, March 2023

大学生における卒業後の進路希望とキャリア観

ー積極的・消極的な労働観に着目してー

飯田 都※1

本研究では大学生のキャリア観について、GOAL次元とMUST次元の両側面からアプローチし、働くことをめぐる考え方の背景にある価値観を消極的な動機も含めて検討することを目的とした。まず第一に、希望する進路にかかわらず、GOAL次元とMUST次元のいずれにおいても、非難回避、家族配慮、安心感の各下位尺度において有意な主効果が認められた。世間から悪く思われないように、家族を養えるように、そして家族と自身が安心感を得られるように、ということを重視する点で、教員志望者、職業未決定者、そしてその他の進路希望者は異なっていた。第二に性別について検討したところ、女性の方が働く目的として自己成長や経済的向上に力点を置いた考え方をし、他者よりも優位な立場になることへの意識が高く、家族のために働かなければならないと強く認識していた。これらの知見を加味した上で、学生への効果的なキャリア支援のあり方が論じられた。

キーワード：大学生，職業観，職業未決定，教員志望，キャリア観

※1 岡山大学学術研究院教育学域

I はじめに

1 問題と目的

近年、経済界における労働をめぐる変化はめまぐるしく、大学生の進路選択におけるキャリア形成上の課題も多岐にわたっている。社会は不確実性を一層増し、学校卒業後に正規の社員として生涯ひとつの会社に奉職するという終身雇用制は崩壊しつつあり、雇用形態の多様化も進んだ。働くことをめぐり当たり前のよう考えられていた既存の価値観はなりを潜め、多様な価値観を認めようというダイバーシティの尊重、働き方改革やワークライフバランス、そして副業の容認といった考え方の変容、労働に対するコミットの仕方と社会全体の改革は加速度的に進んでいる。

このような社会の変化の下で、「なぜ働くのか」という価値観も時代と共に変容しつつある。1990年前後に行われた国際比較調査においてすでに、日本人男性の多くの年代において、生活に占める仕事の重要度は低下がみられ（三隅・矢守, 1993）、会社だけの生活といったライフスタイルから離れる者が増えつつあることが指摘されてきた（佐藤, 1999）。杜（2001）は、日本人の労働観研究を概観する中で、とりわけ若者において収入より仕事そのものが大切だと考える価値観が広がりつつあるとし、実際、清河・山根（2004）は、日本人の労働観の

変遷を考察する中で、労働を自己実現の手段として認識する様子が一貫して存在し、金銭志向性は強いものではないことを指摘している。

しかし近年は、経済的不況、物価高騰、そしてコロナ禍や安全保障をめぐる問題等、より深刻さを増す社会の問題に囲まれ、社会の変化、そして私たちの働くこととのかかわりや考え方も、変容が進んでいると考えられる。内閣府(2017)による「国民生活に関する世論調査」では、なぜ働くのかという問いに対し、「お金を得るため(53.4%)」が過半数を占める一方で、「社会の一員として、務めを果たすため(14.2%)」や「自分の才能や能力を発揮するため(9.0%)」といった積極的かつ自己実現的志向は低い割合が示されている。また、「生きがいを見つけるため」とする積極的な理由を挙げた者の割合は19.9%から18.4%へと減少している。さらには、理想的な仕事としては「自分にとって楽しい仕事(60.1%)」が増加し、「収入が安定している仕事(59.7%)」と共に過半数を超える高い比重を占めた。一方で、「自分の専門知識や能力がいかにせる仕事(41.0%)」は全回答者の半分に満たず、「健康を損なう心配がない仕事(32.6%)」といった消極的回答も見られている。性別に見ると、「社会の一員として、務めを果たすために働く」と答えた者の割合は男性において、そして「生きがいを見つけるために働く」と答えた者の割合は女性において、それぞれ高くなっていった。また、就職みらい研究所(2022)は若者のキャリア観として、「生活のため」「余暇や趣味に投じるため」「社会に貢献するため」が働く目的の大きな割合を占める中、「生活のため」が86.5%と突出していることを報告している。金銭的志向性は強いものでないとした清河・山根(2004)の研究から20年近くの歳月が経った今、若者の労働観にも変化があると考えられる。

一方で大学生については、新卒就職後、早期の離職率が高いことも知られている。厚生労働省(2022)は、大学卒業後3年以内に早期退職した者の割合が31.2%であったことを報告しており(1年目11.6%,2年目9.7%,3年目10%)、大卒者のおよそ3割が早期離職する傾向は、ここ10年程変わらず高い水準で続いている。若者へのキャリア支援が急務とされるゆえんでもあり、昨今の大学生の働くということに対する考え、キャリア観の様相を改めて把握することは不可欠であると考えられる。

佐藤・広田(2003)は、大学1年生を対象とした調査研究を通し、青年の労働動機は9つの因子から構成される多角的側面を持つものであることを確認している。この中には、キャリア観として従来焦点を当てられてきた「社会貢献」「社会の一員としての責任」のような積極的な側面ばかりではなく、古澤・山下(1993)の指摘する「親・先生の勧めと家族への配慮動機」のような消極的な動機を表す因子の存在も報告されている。さらに広田・佐藤(2009)は、キャリア観は、特定状況に依存しない社会に対するルール観である「根源的な社会的なルール観(広田,2010)」によって影響を受けている可能性を指摘し、「何のために働くのか」を表すGOAL次元、ならびに「自分の将来がどのようにあらねばならないか」に関わる信念を表すMUST次元の2つの観点から、大学生のキャリア観について検討を行った。私たちの多くが社会通念として「学校を卒業した

ら働くものだ」「卒業後すぐの4月から新卒者として一斉に就職するものだ」と考えているならば、このことはある種の社会的ルールとなっているといえることができ、大学生のキャリア観も、このような社会に存在するルール観の影響を受けているという。GOAL次元がキャリアの目的感を表すとするならば、MUST次元はこの社会的ルール観とより強くかかわるキャリアの側面を描き出しているといえよう。この2つの次元から考察することにより、複雑性と多面性を帯びた大学生のキャリア観をより詳細にとらえることができると考えられる。森田・石津・高橋(2013)は、中国と日本の大学生のキャリア観を比較する中で、日本の学生の方が、働かないことによって周囲から非難を受けることを避けたい気持ちが高く、その背景として家族以外の人間が関与している可能性を示唆しており、わが国に特有の社会的ルール観が大学生の進路選択や労働観を左右していることも考えられる。

以上のことから、本研究では「なぜ働かなければならないのか」「何のために働くのか」ということに関わる大学生のキャリア観について、消極的な動機も含めたGOAL次元とMUST次元の両側面からアプローチし、働くことについての考えの背景にある価値観を検討することを目的とすることとした。またその際には、希望する進路の種類と性別を考慮することとした。どのような進路を志望しているかにより大学生の学業への取り組み方には違いがあることが報告されており(前田・松尾・浅田・，吉澤・長谷，2017)，現在の学業の先にあるキャリアや働くことに関する考え方にも差異があることが考えられる。また働くことに関わるモチベーション、志向性、認識には性差があることが指摘されていることから(森永，1993；小久保，1998；宗方，2003；森田・石津・高橋，2013)，本研究においても性別の要因を考慮することとした。

II 研究方法

1 調査期間

20XX年7月中旬～9月下旬にかけて実施した。

2 調査対象

関東圏の2大学における、教職課程を履修する2～4年生248名が調査に参加した。欠測値のみられたデータは分析の対象から除外し、最終的に243名(女性172名，男性71名)を分析の対象とした。

3 手続き

教職課程の必修科目授業時間において、講義担当者によって質問紙が配布され、十分な回答時間をとったのち、その場で回収した。その際に、この質問紙の回答は調査者以外の者が見ることはなく、成績等に影響するものではないという旨の教示がなされた。なお、回答所要時間は15分程度であった。

キャリア観の測定：

広田・佐藤(2009)のキャリア観測定尺度を使用した。GOAL 次元尺度と MUST 次元尺度の2つのパートから成り、同内容の事柄について、それぞれの次元を表す2つの項目が作成された。各項目の末尾の表現を「～するため」に統一した場合の尺度を GOAL 次元尺度、末尾の表現を「～しなくてはならない」に統一した場合の尺度を MUST 次元尺度とした。例えば「自分の可能性を広げるため」が GOAL 次元の項目である場合、対応する MUST 次元の項目は「自分の可能性を広げなければならない」という2つの項目が作成される。それぞれの次元について、以下の9つの下位尺度が含まれている。①自己成長：「新たなことに挑戦するため」「自分の能力を伸ばすため」といった自己の成長を目的とする8項目、②非難回避：「働かないと世間体が悪いから」「周りのみんなが働くから」といった、働かないことに対する批判の回避を目的とする5項目、③対人関係：「多くの人と出会うため」「人間関係を広げるため」といった、対人関係を豊かにすることを目的とする5項目、④経済的向上：「裕福な暮らしをするため」「金持ちになるため」といった、経済的に豊かな生活を送ることを目的とする4項目、⑤家族配慮：「親を安心させるため」「働かないと家族に迷惑をかけるから」といった、親に対する配慮を目的とする3項目、⑥安心感：「安心感を得るため」「どこかに所属するため」といった、どこかで働くことにより所属感や安心感を得ることを目的とする3項目、⑦社会貢献：「人の役に立つため」「社会に貢献するため」といった、人や社会への貢献を目的とする3項目、⑧やりがい：「仕事そのものが好きだから」「働くことが生きがいだから」といった、仕事のやりがいや楽しさを目的とする3項目、⑨優越性：「人の上に立つため」「人から羨ましがられたいから」といった相対的な優越意識を得ることを目的とする3項目の、9因子37項目から構成される。「まったくそう思わない(1点)」から「とてもそう思う(5点)」の5件法で回答を求めた。

自由記述：

「人はなぜ、仕事をしなければならないと思いますか？あなたの考えを自由に書いてください」との教示のもと、自由記述式で回答を得た。

4 倫理的配慮

調査への協力は自由であることを教示として口頭で伝えると共に、質問紙の表紙に明記した。得られたデータは統計的に処理し、個人が特定されることはないこと、回答の途中および終了後に回答や協力をしたくないと思った場合には中断してよいことを明記した。質問紙は無記名とし、個人が特定できないようにした。また得られたデータは、個人情報の保護のため、厳重に保管ならびに処理を行った。

Ⅲ 結果

1 積極的キャリア観 (GOAL 次元) と進路希望

質問に対する回答を数値化し、尺度ごとに合計得点を算出し項目数で除した値を尺度得点として分析した。回答者全体、および進路希望別に算出したキャリア観の各次元の記述統計量を TABLE1 に示す。TABLE2 および 3 ではそれぞれ、性別に算出した記述統計量を示している。性別と進路希望別の主効果があるかを検討するため、キャリア観測定尺度の各下位尺度得点を従属変数とし、進路希望 (教員, 職業未決定, その他の進路) と性別を要因とする分散分析を行った。

TABLE1：進路希望別にみたキャリア観の下位尺度得点の平均値

進路希望	次元	キャリア観								
		自己成長	非難回避	対人関係	経済的向上	家族配慮	安心感	社会貢献	やりがい	優越性
全体 (N = 243)	GOAL	3.92 (0.60)	3.12 (1.09)	3.91 (0.73)	3.76 (0.80)	4.11 (0.91)	3.53 (0.88)	3.76 (0.99)	3.44 (1.00)	2.37 (0.93)
	MUST	4.05 (0.70)	2.75 (1.10)	3.61 (0.84)	3.29 (0.90)	4.12 (0.91)	3.35 (0.87)	3.55 (0.96)	3.36 (1.04)	2.20 (0.99)
教員 (N = 75)	GOAL	3.89 (0.65)	3.34 (1.12)	4.03 (0.67)	3.66 (0.86)	4.31 (0.73)	3.70 (0.80)	3.85 (0.93)	3.47 (0.93)	2.28 (0.77)
	MUST	3.96 (0.82)	2.98 (1.12)	3.63 (0.87)	3.18 (0.90)	4.36 (0.79)	3.54 (0.78)	3.63 (0.91)	3.39 (1.09)	2.09 (0.88)
職業未決定 (N = 66)	GOAL	3.87 (0.62)	3.14 (1.04)	3.86 (0.81)	3.85 (0.76)	4.15 (0.90)	3.68 (0.83)	3.71 (0.89)	3.38 (1.03)	2.60 (1.02)
	MUST	4.03 (0.68)	2.79 (1.11)	3.61 (0.85)	3.38 (0.77)	4.21 (0.93)	3.33 (0.88)	3.52 (0.96)	3.21 (1.04)	2.25 (1.09)
その他 (N = 102)	GOAL	3.97 (0.55)	2.93 (1.08)	3.84 (0.71)	3.77 (0.79)	3.92 (1.01)	3.31 (0.93)	3.71 (1.08)	3.44 (1.04)	2.27 (0.93)
	MUST	4.11 (0.62)	2.56 (1.05)	3.58 (0.81)	3.32 (0.96)	4.08 (0.99)	3.23 (0.92)	3.50 (1.00)	3.42 (0.99)	2.22 (1.00)

※ () 内は SD

TABLE2：キャリア観(GOAL 次元)と進路希望

尺度名	進路希望			性別	F値			多重比較
	教員志望	未決定	その他		進路希望主効果	性別主効果	交互作用主効果	
G_自己成長	3.59(0.17)	3.95(0.15)	4.03(0.12)	女	0.70	5.37*	1.89	未決定女－未決定男* その他女－その他男*
	3.91(0.18)	3.59(0.29)	3.74(0.23)	男				
G_非難回避	3.52(0.17)	3.13(0.15)	2.99(0.12)	女	3.60*	1.42	0.54	その他女-教員志望女*
	3.15(0.18)	3.19(0.29)	2.72(0.23)	男				
G_対人関係	4.00(0.64)	3.91(0.78)	3.91(0.69)	女	2.97	2.40	1.33	
	1.06(0.71)	3.67(0.91)	3.59(0.75)	男				
G_経済的向上	3.86(0.81)	3.88(0.76)	3.83(0.79)	女	0.68	5.20*	0.57	女－男** 教員志望女－教員志望男*
	3.44(0.86)	3.77(0.78)	3.55(0.74)	男				
G_家族配慮	4.27(0.81)	4.21(0.87)	4.00(1.01)	女	5.36**	1.93	1.24	その他－教員志望* その他男－教員志望男*
	4.35(0.64)	3.93(1.04)	3.64(0.95)	男				
G_安心感	3.83(0.76)	3.71(0.82)	3.38(0.95)	女	6.14**	3.68	0.19	未決定－その他* その他－教員** その他女－教員志望女*
	3.55(0.82)	3.57(0.89)	3.05(0.86)	男				
G_社会貢献	3.77(0.95)	3.77(0.86)	3.78(1.06)	女	1.29	0.86	1.36	
	3.96(0.91)	3.48(1.00)	3.47(1.15)	男				
G_やりがい	3.53(0.16)	3.40(0.14)	3.45(0.11)	女	0.21	0.46	0.01	
	3.41(0.17)	3.29(0.27)	3.38(0.22)	男				
G_優越性	2.52(0.78)	2.62(1.07)	2.31(0.94)	女	2.27	4.22**	0.81	女－男* 教員志望女－教員志望男*
	2.01(0.66)	2.50(0.82)	2.11(0.91)	男				

*p<.05, **p<.01

進路希望と性別に有意な交互作用は認められなかったものの、進路希望は非難回避、家族配慮、安心感において、性別は自己成長、経済的向上、優越感において、有意な正の主効果が認められた。

進路希望について Tukey の HSD 法による多重比較を行った結果、非難回避については教員志望＞職業未決定＞その他の進路の順に得点が高いという結果が示され、教員志望とその他の進路の間に、5%水準で有意な差がみられた。家族配慮については、教員志望＞職業未決定＞その他の進路の順で得点が高く、教員志望とその他の進路の間に、5%水準で有意な差がみられた。安心感については、教員志望＞その他の進路＞未決定の順で得点が高く、未決定とその他の進路の間で1%水準、その他の進路と教員志望の間 5%水準で有意な差が認められた。

性別について Tukey の HSD 法による多重比較を行った結果、自己成長については女性＞男性で5%水準、経済的向上については女性＞男性で1%水準、優越感については女性＞男性で5%水準で有意な差異が認められた。

2 消極的キャリア観(MUST 次元)と進路希望

前項と同様の手順でキャリア観測定尺度の各下位尺度得点を従属変数とし、進路希望(教員志望、その他の進路、職業未決定)と性別を要因とする分散分析を行った(TABLE3)。自己成長において、5%水準の有意な交互作用がみられた。進路希望は非難回避、家族配慮、そして安心感において、性別は家族配慮において、有意な正の主効果が認められた。

進路希望について Tukey の HSD 法による多重比較を行った結果、非難回避については、その他の進路希望＞職業未決定＞教員志望の順で得点が高く、その

他の進路希望と教員志望の間に 5%水準の有意な差異がみられた。家族配慮については、教員志望>職業未決定>その他の進路の順で得点が高かったが、各群の間に有意な差異は認められなかった。安心感については、教員志望>職業未決定>その他の進路の順で得点が高く、教員志望とその他の進路の間に 5%水準の有意な差異がみられた。

性別について Tukey の HSD 法による多重比較を行った結果、家族配慮については、女性>男性の得点となったが、その差異は有意なものではなかった。

TABLE3：消極的キャリア観(MUST 次元)と進路希望

尺度名	進路希望			性別	F値			多重比較
	教員志望	未決定	その他		進路希望主効果	性別主効果	交互作用主効果	
M_自己成長	3.87(0.11)	4.13(0.10)	4.15(0.08)	女	0.62	1.64	3.18*	
	4.08(0.12)	3.70(0.19)	3.97(0.15)	男				
M_非難回避	3.28(1.18)	2.76(1.06)	2.59(1.05)	女	3.15*	1.99	1.88	その他-教員志望* その他女-教員志望**
	2.64(0.96)	2.87(1.33)	2.44(1.04)	男				
M_対人関係	3.62(0.13)	3.60(0.12)	3.61(0.09)	女	0.29	0.07	0.30	
	3.64(0.14)	3.64(0.23)	3.45(0.18)	男				
M_経済的向上	3.34(0.14)	3.43(0.12)	3.36(0.10)	女	0.44	3.52	0.12	
	3.00(0.15)	3.21(0.24)	3.16(0.19)	男				
M_家族配慮	4.35(0.14)	4.31(0.13)	4.19(0.10)	女	4.04*	5.77*	1.78	その他女-その他男* その他男-教員志望男*
	4.36(0.15)	3.83(0.24)	3.68(0.19)	男				
M_安心感	3.60(0.79)	3.37(0.88)	3.28(0.92)	女	3.61*	2.21	0.10	その他-教員志望*
	3.48(0.77)	3.16(0.92)	3.03(0.91)	男				
M_社会貢献	3.51(0.15)	3.53(0.13)	3.58(0.11)	女	1.28	0.14	2.14	
	3.77(0.16)	3.50(0.26)	3.18(0.21)	男				
M_やりがい	3.56(0.16)	3.26(0.14)	3.41(0.12)	女	1.14	1.44	0.72	
	3.19(0.18)	3.02(0.28)	3.46(0.22)	男				
M_優越性	2.29(0.88)	2.25(1.15)	2.18(1.00)	女	0.74	0.45	1.66	
	1.86(0.83)	2.24(0.87)	2.33(1.02)	男				

*p<.05, **p<.01

3 キャリア観に関わる自由記述の対応分析

「なぜ働くのか」という問いに対する自由記述式回答について、キャリア観の全体像を明らかにすることを目的とし、KHCoder（樋口，2014）を用いて、進路希望および性別に基づいて、質的データ解析のための多変量解析法である対応分析を行った（FIGURE1, 2）。自由記述においてある語が出現する際、出現パターンの類似した（共起の程度が強い）抽出語を線で結んだネットワーク図となっている。語と語の関連性の強さが線の太さで表現されており、色のグラデーションにより、得られたトピックがグループ別に表示されている。なお、円の大きさは、語の出現頻度を表している。原点から離れた位置にある語は、そのカテゴリーに特有の特徴を有しているとされる。また関連の強いカテゴリー同士は位置的に近くプロットされ、類似の記述や、特徴ある記述を視覚的に把握することができる。

(1) 進路希望

進路希望別の結果を、各群の差異が顕著な上位 30 語をもとに FIGURE1 に示した。教員志望、その他の進路、進路未決定の 3 群にわけ、対応分析を行った。

教員志望者に特徴的なキャリア観を表す語として「必要」「仕事」「人」「最低限」「支える」「養う」といった主に 6 つの特徴的なトピックが抽出された。具体的な記述は以下の通りである。①「自身に**必要**なお金をかせぐ」「生命維持に**必要**なものを手に入れる」「日本の経済を動かすには労働が**必要**」「**必要**とする人のため」といった、生きるためには不可欠で、義務に近い捉え方をしている様子のうかがえる記述である。②「**仕事**をしてお金を得る」「どのような**仕事**でも誰かの役に立つ」「食料をみつけ住む所をどうにかするために**仕事**をする」「**仕事**をしてお金を得る」といった記述が得られ、社会の中で生きていくためであったり、貢献するための手段としての認識が反映されている。③「親や今まで自分を支えてくれた**人**たちに恩返しする」「他の**人**のため」「**人**の人生を豊かにできる」「**人**とのかかわり」「**人**は一人では生きていけない」のように、対社会・対人的な貢献意識が反映されたものの他、人間が他者依存的側面を持った社会的存在であることの認識からその関係性維持のために必要だと考えている記述が見出された。④「**最低限度**の生活を送るため」「社会で人間として生きていく上での**最低限**のルール」「**最低限度**の生活を送るため」といった記述に占

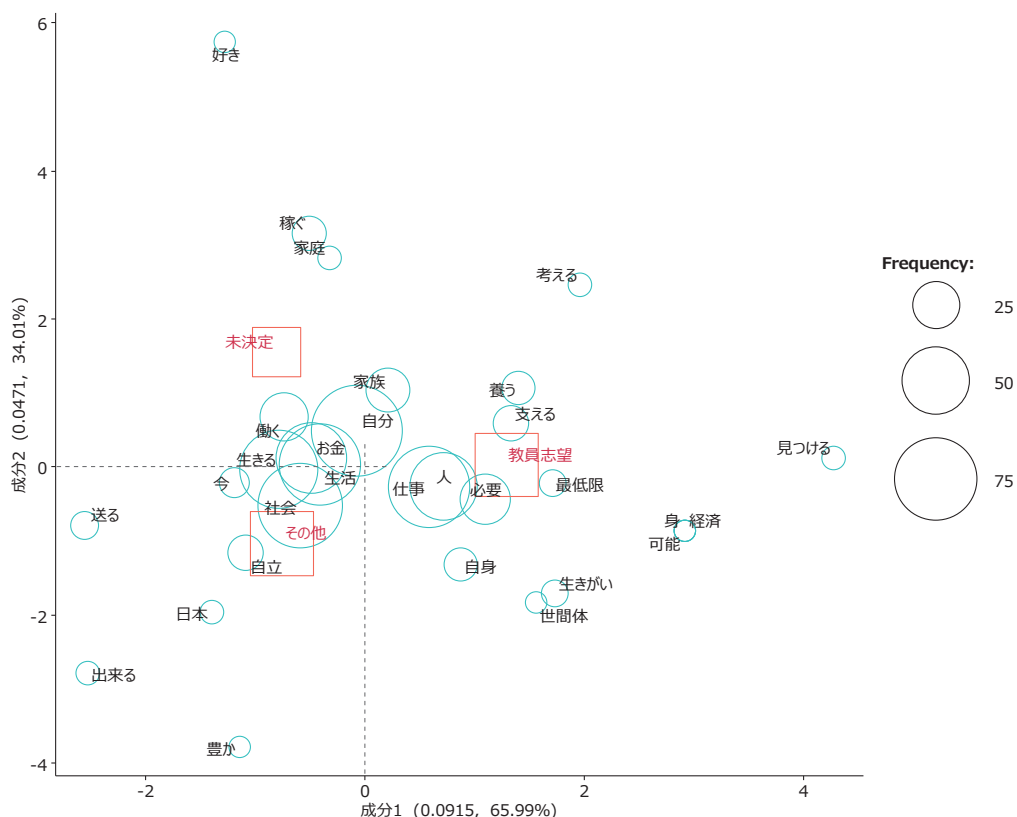


FIGURE1：進路希望別にみたキャリア観に関わる対応分析

められ、人間的な最低限度の生活を送るための要件としての捉え方が反映されていた。⑤「今までに**支えて**下さった方々への恩返しや成長の証を見せる」「自分の力で自立し、家族を**支える**」「人と人とは**支え合**って社会を形成しているので、社会の一員として」「自分で自分を**支える**ことのできる人間がそうでない人間を**支えている**という現実がある」「**支え合**って人は生きていくもの」といった、つながり合う人間観や報恩の気持ちが表された記述が得られた。⑥「給料を得て、自分、もしくは家族を**養い**、社会を回す」「家族を**養い**周囲に安定を与える」といった記述に占められ、特に身近な扶養責任範囲にある家族の生活を保障するための手段としての認識が示された。

次に、進路未決定者のキャリア観についてである。特徴的な語は比較的少なく、「働く」「お金」「家庭」「家族」「稼ぐ」「生きる」といった、働くことに関わる一般的な語が集まっている。「**働か**なくては**お金**が手に入らない」「**働か**ないと生活できない」「**お金**を得なければ**生き**ることができない」「**家庭**を築くため」「**家庭**を守るため」「**家族**、親戚を安心させるため」といった記述であった。

第三に、教職以外のその他の進路を希望する学生のキャリア観についてである。進路未決定者同様、特徴的な語は教職志望者に比べると比較的少ない数に集約され、「社会」「自立」「今」「生活」「日本」などの語が特徴を持っていた。「**社会**への貢献」「**社会**の一員として」「**自立**して生きていく」「**今**まで自分を守ってくれた両親のため」「**今**までに**支えて**下さった方々への恩返しや成長の証を見せたりするため」「**今**の時代」「**生活**費を稼ぐ」「現在の**日本**」「**日本**の経済を動かす」といった記述が例として挙げられる。

(2) 男女別

次に性別による対応分析の結果である(FIGURE2)。まず第一に、男子学生のキャリア観を表す語として「家族」「最低限」「送る」「必要」「食べる」「仕事」「見つける」「人」「身」といった特徴的なトピックが抽出された。具体的な記述は以下の通りである。①「**家族**のため」「**家族**が生活していくため」、②「**最低限**のルールである」「**最低限度**の生活を送る」、③「自立した生活を**送る**」「より豊かな生活を**送る**」、④「お金が**必要**」「生き延びるために**必要**」、⑤「**食**べていく」、⑥「**仕事**をして社会に貢献する」「**仕事**をしてお金を得る」、⑦「何かやりがいがあることを**見つけ**」「学習したことを活かす場所を**見つけ**」「生きがいを**見つけ**なければならない」、⑧「**人**の人生を豊かにできる」「**人**とのかかわり」「**人**として認められる」、⑨「他人とのコミュニケーション能力をもっと**身**に付けることができる」「必要最低限の経済力を**身**に付け、家庭を守る」「**身**につけたものの成果を発揮する」。このように、何のためという特別な目的を持つ以前の所与のこととして働くことを捉え、自身をはじめ家族が生活していくためになくしてはならないお金を得るための行動として認識されている。また、働くことを通して社会の中で存在を認められたり、自身の能力を活かしたり、やりがいのある何かを見つけていくことを期待している様子がうかがえる。

次に女子学生に特徴的な語であるが、生きる、自分、働く、稼ぐ、成り立つ、得る、貢献、生活、お金、人間、親、高めるといった語が特に多く見出された。具体的な記述は以下の通りである。①「生きていくため」「生きる意欲を持つ」、②「**自分**を高める」「**自分**と社会とのかかわりを持つ」、③「大人として自立した生活をするために**働く**べき」「**働**かないと、人との関わりがなくなる」、④「仕事をして**稼ぐ**」「お金を**稼ぐ**」、⑤「社会が**成り立た**ない」「生活が**成り立つ**」、⑥「お金を**得る**」「生きがい**を得る**」、⑦「社会に**貢献**する」、⑧「自分の力で**生活**」「**生活**できない」、⑨「**お金**が必要」「将来の**お金**」、⑩「一人の**人間**として自立」、⑪「**親**に感謝したいから」「**親**が安心しない」「**親**の負担を軽くする」、⑫「自分を**高める**」「自分の得意とする分野の専門性を**高め**たい」。このように、生きていくための不可欠な手段であるとともに生きがいや自己発揮の行動として認識されている点で男子学生に見られた傾向性と重複する部分がある。一方で、親への感謝や安心させたいという思い、社会や自身の生活を成立させているもの、自身の向上のための手段、という点で特徴的であると考えられる。

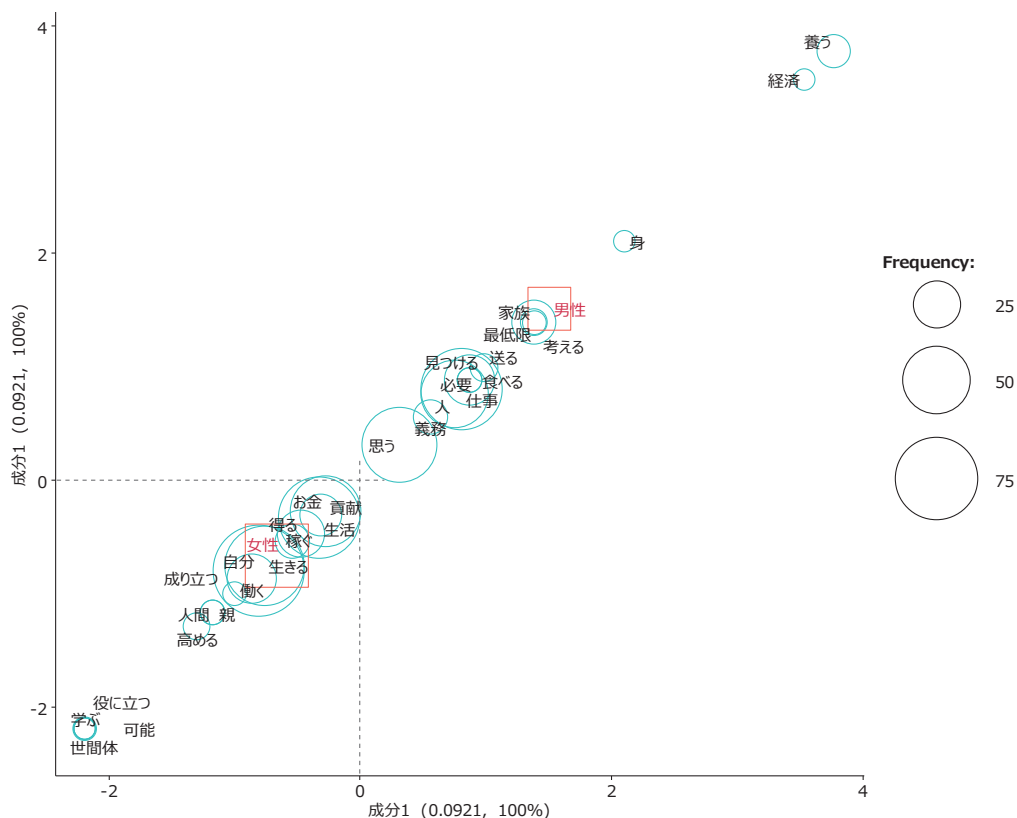


FIGURE2：男女別にみたキャリア観に関わる対応分析

IV 考察

本研究では大学生のキャリア観について、GOAL次元とMUST次元の両側面からアプローチし、働くことをめぐる考え方の背景にある価値観について、消極

的な動機も含めて検討することを目的とし分析を行った。

まず進路希望別には, GOAL 次元と MUST 次元のいずれにおいても, 非難回避, 家族配慮, 安心感の各下位尺度において有意な主効果が認められ, 働く目的, 働かねばならない理由の認識において, 差異を生じる要因となっていた。世間から悪く思われないように, 家族を養えるように, そして家族と自身が安心感を得られるように, ということを重視する点で, 教員志望者, 職業未決定者, そしてその他の進路希望者は異なっていた。具体的には, 非難回避においては教員志望者の GOAL/MUST 次元が最も高く, その他の進路を希望する者が最も低かった。中でも女子学生にその傾向性が強く認められた。家族配慮においても教員志望者が GOAL/MUST 次元いずれにおいても最も高い値を示しており, その他の進路を希望する者が最も低かった。この下位尺度においては, 男子学生にその傾向性が強く認められた。そして安心感においても教員志望者が GOAL/MUST 次元いずれにおいても最も高い値を示しており, その他の進路を希望する者が最も低いという結果になった。GOAL 次元において, 女子学生にその傾向性が特に顕著である。教職という職務の性質を考えたとき, 教員志望者のキャリア観として, 対人関係, 社会貢献, やりがいといった点で, 他の進路希望者／未決定者との間に差異がみられることを予測したが, むしろ教員志望者は家族への配慮や非難回避, 安心感といった点に, 価値や社会的ルールとしての意味合いを感じていた。また職業未決定者については, アイデンティティの未成熟や混乱, 探索等の状態にあり, キャリア観にもその様子が表れるのではないかと予想したが, 他の学生群との比較においては大きな差異や特徴は見出されなかった。職業未決定者は, 進路についての決断は未だついていないながらも, 自己成長をしなくてはならない, 対人関係を広げたい, また広げなくてはならないものと考え, 経済的向上や家族配慮に力点を置いたキャリアの捉え方をしている。社会貢献の意識も他の学生と同等に持ち合わせていることが示された。むしろその他の進路希望者において, キャリア観を構成するいずれの側面／次元においても低い傾向がみられた。一般企業への就職や留学, 進学, 公務員を志望している, その他の進路希望者のキャリア観は, 自己成長を希求すると共に, しなければならないものであると認識しているが, その他の各下位尺度においても概ね他の学生群と同等程度である。しかし, 非難回避や家族配慮, 安心感についての得点が GOAL/MUST 次元いずれにおいても低いことが特筆される。キャリアを考えるにあたり, 自身を取り巻く家族等の他者のことに配慮する必要がある比較的薄い状況にあることが推察される。自由記述の結果からは, いずれの学生群においても, 社会的ルール観を反映したキャリア観が多く見出された。進路未決定者には特徴的な語が比較的少ないのに対し, その他の進路希望者からは「社会」「自立」「生活」「今」「日本」といった語が象徴的で, 身近な自身の生活で自立することのみならず, 社会や国といった単位でキャリアを考えている様子が見受けられる。教員志望者においては, 「養う」「支える」「最低限」「必要」といった語が特徴的で, 家族などの身近な人への配慮や恩返し, 自身が他者を支えるという意識がみられた。

次に性別についてであるが、GOAL 次元においては自己成長、経済的向上、優越性において有意な主効果が認められ、女性の方がいずれも高いという結果となった。MUST 次元においては家族配慮についての主効果のみが有意となっており、女性の方が高い得点を示した。つまり性差としては、女性の方が働く目的として自己成長や経済的向上に力点を置いた考え方をし、他者よりも優位な立場になることへの意識が高いといえ、家族のために働かなければならないという社会的ルール観も強く認識しているということである。

以上のように、学生のキャリア観は、進路希望そして性別により、その様相には差異が見出された。積極的な価値観だけでなく、消極的側面も検討することにより、この差異はより明確になったと考えられる。特に教職志望者、女子学生においては、自身のキャリアを考える上で、家族への配慮や世間体等の外的な要因への懸念や責任感に強く規定されている様子がみられた。高橋・森田・石津(2014)は、キャリア観とメンタルヘルスの関連を検討し、非難回避ではなく自己成長を求めるキャリア観を持つこと、現在の就労状況に関わらず、ポジティブなキャリア観を持つことがメンタルヘルスにより重要であることを示唆している。換言すれば、非難回避にとらわれたキャリア観は、仮に希望の進路が叶ったとしても、メンタルヘルスの不良をはじめとした問題に直面しやすいと考えられる。卒業後も長く豊かにキャリアを形成していくことができるようにするためにも、置かれた状況や責任感だけに規定されない進路選択やキャリア観の熟成を支援していく必要がある。効果的支援の実施時期として、村上・原・三好(2015)は2年次が重要であると指摘している。職業観とアイデンティティーについて検討する中で、高い職業志向を持って大学に入学するが、2年次で葛藤状態に陥り、学年の進行とともに理想と現状との折り合いをつけて職業を選択するという変遷があるためである。自己効力感も1年次において最高、2年次において最低となり、3年および4年次において回復傾向を見せる傾向が示されており、入学後の節目となる時期を捉えた計画的なキャリア支援が望まれる。

今後の課題として、キャリア観の特性論的なとらえ方の必要性が挙げられる。本研究をはじめとしたキャリア観に関する多くの研究において、キャリア観はどちらかというと類型論的な認識で捉えられ、そのタイプが検討されてきた。しかし、進路や職業の決定に当たって表出するキャリア観とは、多くの要素が重層的に積み重なった総和としてイメージする方が実際に近いように思われる。本研究の例でいうならば、キャリア観を構成する9つの要因と2つの次元で表されるいずれの構成要素も、高低により一部分の特徴的な要素のみをピックアップして論じるよりも、各構成要素の割合や比重の違いを加味した総体として捉えて検討することにより、より実際に近いキャリア観を捉えることができるのではないだろうか。

参考・引用文献

- 古澤照幸・山下利之(1993). 女子高校生の進路志望動機と進路決定 社会心理学研究, 8-2, 98-106.
- 樋口耕一(2014). 内容分析の継承と発展を目指して ―社会調査のための計量テキスト分析― ナカニシヤ出版
- 広田信一・佐藤純(2009). キャリア観に関する検討 ―ルール認知の観点から― 山形大学紀要, 14, 371-385.
- 広田信一(2010). 根源となる社会的ルール観に関する検討 山形大学紀要(教育科学編), 15, 85-93.
- 広田信一・佐藤純(2011). 社会的ルール観とキャリア観の関連に関する検討 山形大学紀要(教育科学), 15, 95-104.
- 清河雪彦・山根弘子(2004). 日本人の労働観 大原社会問題研究所雑誌, 542, 14-33.
- 小久保みどり(1998). 大学生の職業選択 ―キャリア開発へのモチベーションとキャリア志向― 立命館経営学, 37-3, 1-20.
- 厚生労働省(2022). 「新規卒者の離職状況」
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137940.html>
(2023年1月10日閲覧)
- 前田 一誠・松尾 健太郎・浅田 栄里子・吉澤 英里・長谷 浩也 (2017). 大学生のキャリア選択と修学意欲― 教員養成課程での検討 ― 教職教育研究, 1, 1 41-46.
- 杜新(2001). 「日本人の労働観」研究の歴史的変遷 ―その位相と今日的課題― 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 社会学心理学教育学, 52, 39-49.
- 森永康子(1993). 男女大学生の仕事に関する価値観 社会心理学研究, 9-2, 97-104.
- 森田慎一郎・石津和子・高橋美保(2013). 大学生における働くことの意味の日中比較 臨床心理学, 3, 247-258.
- 三隅二不二・矢守克也(1993). 日本人の勤労価値観 「第2回働くことの意味に関する国際比較調査」から 組織科学, 26, 83-96.
- 宗方比佐子(2003). キャリアモチベーション尺度の開発 金城学院大学論集(人間科学編), 8, 1-16.
- 村上竜馬・原千恵子・三好一英(2015). 大学生のアイデンティティと職業選択の年次変化 ―アンケート調査結果の分析― , 東京福祉大学・大学院紀要, 第6巻, 39-46.
- 内閣府(2017). 「平成29年度 国民生活に関する世論調査」
- 佐藤純・広田信一(2003). 大学生の労働観に関する探索的研究 ―労働動機の側面から― , 発達臨床心理学研究, 15, 31-36.
- 佐藤博樹(1999). 日本型雇用システムと企業コミュニティ (稲上毅・川喜多喬編『講座社会学6 労働』東京大学出版会, pp. 33-73.)

下山晴彦(1986). 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34 巻 1 号 p. 20-30.

就職みらい研究所(2022). ー大学生のキャリア等に関する価値観についてー

[https://shushokumirai.recruit.co.jp/wp-](https://shushokumirai.recruit.co.jp/wp-content/uploads/2022/07/report_20220728_2.pdf)

[content/uploads/2022/07/report_20220728_2.pdf](https://shushokumirai.recruit.co.jp/wp-content/uploads/2022/07/report_20220728_2.pdf)

(2023 年 1 月 10 日閲覧)

高橋美保・森田慎一郎・石津和子(2014). 正規雇用・非正規雇用・完全失業者のメンタルヘルスの比較検討 日本労働研究雑誌, 56, 82-96. 82-96.

謝辞

調査に協力し率直な考えを聞かせてくださった学生の皆さんに、心より感謝申し上げます。

Post-graduation career aspirations and career views among university students

- A focus on active and passive views of work

IIDA Miyako *1

The purpose of this study was to approach the career views of university students from both the GOAL and MUST dimensions, and to examine the values behind their thinking about working, including negative motivations. First of all, regardless of the desired career path, significant main effects were found for each subscale of blame avoidance, family consideration and sense of security in both the GOAL and MUST dimensions. Aspiring teachers, undecided professionals and people on other career paths differed in terms of their emphasis on avoiding negative public perception, being able to provide for their families, and feeling secure in their families and themselves. Secondly, when gender was examined, women were more likely to focus on personal growth and economic improvement as the purposes of working, to be more conscious of their superiority over others, and to have a strong perception of having to work for the sake of their families. Taking these findings into account, effective career support for students was discussed.

Keywords: university students, occupational outlook, undecided occupation, aspiring teachers, career outlook

*1 Faculty of Education, Okayama University
